
DEVIL TAIL <悪魔の尻尾>

超魔導士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEVIL TAIL > 悪魔の尻尾<

【Nコード】

N0787X

【作者名】

超魔導士

【あらすじ】

FAIRY TAILの世界を舞台に一人の青年が半人半魔の力を手にして駆け抜ける。スタイリッシュアクション満載(?)のぶつとびファンタジーが始まる。

物語のはじまり

「ここは……何処だ？」

目を覚ますと、最初に見えたのは視界いっぱい広がる真っ白な世界だった。

「…………あれ？俺ってたしか車に轢かれて死んだんじゃないかって？」

そう呟いて、車に轢かれた時の事を思い出した。

その時

「そこの御主。」

「ん？」

突然呼ばれ、そっちの方に視線を向けると長くて立派な髭を生やしたじいさんが立っていた。

すると

「すまんかったー！！！！」

いきなり土下座をして謝ってきた。

「おい、じいさん。なんで現れて早々土下座なんかしてんだよ。ていうか、俺死んだのになんでこんな所にいるんだ？」

「その、実はの御主を死なせてしまったのはわしのせいなんじゃ。」

「ええ！？マジで！？」

青年は驚き、老人からこれまでの経緯を聞かされた。

老人が神様である事や、青年の事に関する書類を汚してしまいそれが原因で死んでしまった事を聞いた青年は

「ああ、別にいいよ？許したげる。」

「ええ！？」

「いや、だって別にわざとじゃないんでしょう？だったらいいよ。」

「しかしそれでは、わしの気が収まらんぞ。」

「えつ、そうなの？じゃあ、転生……ってできる？」

「転生か？そんなことならお安いご用じゃー！それと、願い事も好きなものをいくらでも叶えてやるぞー！」

青年の言葉を聞いて、神様はなんでも来いといった感じで胸をドンツと叩いた。

「マジ！？じゃあ、転生先はFAIRY TAILの世界で、容姿

は Devil May Cry 4 のダンテで、魔力は無限に近いぐらいにして、武器は4の全部……………ってのはできる?」

「なんのそのくらい、わしにとっては朝飯前じゃ。」

「よっしゃ!」

「では…………。」

神様はそう呟くと、地面に持っていた杖をコンッコンッと二回叩いた。

すると、突然何もない空間から扉が現れた。

「この扉をくぐれば、FAIRY TAILの世界じゃ。能力や容姿は向こうについてから渡すから安心せい。」

「わかった!」んじゃ、いろいろありがとな神様!」
青年はそう言うと、扉を開け走っていつてしまった。

今ここに、一人のデビルハンターの物語が始まるのだった。

目覚めていきなり戦闘開始！？

「…うう…ここは…着いたのかFAIRY TAILの世界に…」

転生した青年は、目を覚まし辺りを見渡した。

すると、落ちている手紙に気が付き拾い読んでみた。

「この手紙を読んでいるということは、無事にFAIRY TAILの世界に転生できたようじゃな。さて、ここから本題なんじゃが、容姿、武器、魔力は御主の要望通りにしておいたぞ。…ちなみにオマケで、四種類のスタイルアクションと魔人化も使えるようにもしておいたからの。…P・S 武器は別空間にしまっており、念じれば出てくるはずじゃ…あと、そっちの世界での御主の名はダンテじゃ…それと今は原作の2年程前じゃ…」

「ふん、なるほど。…じゃあ試しに…」

神様からの手紙を読んだ青年…もといダンテは目を瞑り二種類の武器を思い浮かべた。

すると、背中と両手に重量感を感じ見ると二丁の大型拳銃を両手に持ち、骸骨の装飾がある身の丈程の大剣を背負っていた。

「やっぱりダンテには、リベリオンとエボニー&アイボリーが似合うな…！」

そう言つて、両手の拳銃をクルクル指で回して遊んでいると

『ウホッ…ウホホッ…』

「ん？……あれ、いつの間に？」

拳銃遊びに夢中になりすぎたのか、いつの間にかダンテはゴリラのようなモンスターの群れに囲まれていた。

「まつ、いつか。能力確認の手間がはぶけたぜ。」

そして、ダンテはニヒルな笑みを浮かべゴリラ擬きの群れに向かって手招きして挑発した。

「C・mon wimp!!（来な、ノロマ野郎!!）」

その挑発に、ゴリラ擬き達は怒り狂い一斉に飛びかかってきた。

「ハア…ハア…ハア…」

辺りを木々で囲まれた森の中、どこかへ急ぐように駆ける少女と羽の生えた白い猫のような生き物がいた

少女は深い青色の腰まで伸びた髪、右肩になにか生き物を模したようなタトゥーが描かれていて、今はまだ幼い顔を疲労のためか少々苦しそうに歪めながら小さな手足を使い走っていた

「こ、このさきだよね？シャルル。」

「たぶんね……というより今も聞こえるけど、これだけの発砲音が生きてるんだから聞くまでもないでしょ？」

「ううゝ、ごめんなさい。」

「すぐに謝らない！！それより急ぎましょう！！」

「う、うん！！」

シャルルと呼ばれた白い毛並みの猫が少女を急かすが、なぜこんな森の中にいるのか不思議なほど幼い見た目の少女はそれほど早くは走れない。

「別に、ウエンディがいいなら行く必要はないのよ？」

「うゝん、でもシャルルも気になるでしょ？」

「まあ、そうだけど……」

ウエンディとシャルル、二人はこの森まで薬草を取りに来ていたのだがつい先程から、モンスターの叫び声と耳をつんざくような発砲音が聞こえてきたのだ。

いくら得たいの知らない事だとしてもそれだけのことが近辺で起き、しかも時々聞こえる挑発するような声まで聞こえたとなれば魔導師ギルドの一員としてはほうっておける筈もない。

「ウエンディ！！そろそろ着くわよ！！」

「う、うん！！」

そして、ウエンディとシャルルは現場と思われる場所についた。

そこで、ウエンディとシャルルが一番驚いたのは、異常に集まったバルカンでも、至るところにある銃痕でも、所々で気絶しているバルカンでもなく

赤いロングコートを翻し片手に持った拳銃を撃ちながら、もう片方の手に持っている骸骨の装飾がある身の丈程の大剣を華麗に振り回しバルカンを斬り伏せている、薄く髭を生やした中年の男性の姿だった。

「Where's your motivation? (…やる気あるのか?)」

ダンテはそう言いながら、リベリオンを横に振るいゴリラ擬きをまとめて六匹吹っ飛ばした。

ちなみに、現在リベリオンの刃には魔力を纏わせ斬れないようにしているため周りのゴリラ擬き達は気絶しているだけである。

「それにしても、数が多いねえ。…じゃ、さっそく使ってみるかス
タイルアクション!!」ソードマスター「Sword Master」

ダンテは指をパチンツと鳴らしエコーのかかった声でそう言つと、身体から一瞬眩しい光を放った。

そして、ゴリラ擬きの群れに向かって踏み込み

「イイイヤアッ！！！！」

リベリオンを思いきり前に突きだす技>スティング<を放ち、群がっていたゴリラ擬きを吹き飛ばした。

しかし、すかさず他のゴリラ擬き達が襲い掛かってくるが

「B l a s t ！！（吹っ飛べ！）」

ブウオオオンッ

ダンテはその場で回転斬りを行い、ゴリラ擬き達を一掃した。
そして、リベリオンを肩に担ぎ呟いた。

「T o o e a s y ……さてと。」

チヨロいな

決め台詞を決めたダンテはリベリオンを背中に背負いその場を動こうとしたその時

「きゃああああっ！！??」

後ろの森の方から悲鳴が聞こえた。

「ウエンディ！！」

シャルルの絶叫とも悲鳴ともつかからない声がバルカンの声にほとんどかき消されながらも木霊した。

先程の戦闘、ウエンディがダンテの剣技やその威力を見て驚いていたそのわずかな時間でいつの間にか近づいていたバルカンにウエンディが連れ去られたのだ。

シャルルは咄嗟にエーラを使い逃げたがウエンディは反応出来ずそのままバルカンに捕まり連れ去られてしまった。

「さっきの男……………」

一挙一動がすさまじく速く、一瞬でバルカンを数十体吹き飛ばす様はただ者には見えなかった。

シャルルはその男にウエンディを助けてもらおうと振り返るが、彼の姿はなかった。満身創痍の状態でもあったのだ、バルカンが逃げ出したと同時に帰ったのかもしれない
だからそれは、星に願うような、叶うことのない呟きのはずだったが

「それは、俺のことか？子猫ちゃん。」

「えっ！？」

シャルルが今いるのは背の高い木々の丁度てっぺんの場所。普通の人間が位置できるような場所ではない。

しかし、男はいた。

シャルルのすぐ隣、木のてっぺんの上で器用に立っていた。

「えっ…………あ、あんた……………」

「ここにいるかってか？簡単さ、普通に登ってきたんだよ。それにしても……………」

「な、なによ？」

ダンテは言葉を区切りシャルルをじーっと見始め、シャルルは少し戸惑った。

そして

「おしゃべり子猫ちゃんか。猫の大会に出たら優勝間違いなしだな
！！」

「そんな大会、出るわけないでしょー！？
シャルルは盛大にツツコミをした。」

「（な、なんなのこの男！！）
そう思うのは仕方ないだろう。」

バルカン何十体を相手に余裕で戦っていた強者がケタケタ笑いながらまるで漫才のようなことを言い出したのだから。

「出ないのか？」

「当たり前よ！！……って、そんなこと言ってる場合じゃないわ！！
ウエンデイが！？」

「ん？ウエンデイ？」

「そう、バルカンに拐われちゃったのよ。私じゃ追い付けないから、
貴方お願いできないかしら？」

そう言って、シャルルは悲しそうな表情をしながらダンテに頼み込んだ。

「ああ、さっきの悲鳴はそのウェンディって子の悲鳴だったのか。」

「何を他人事みたいなこと言ってるのよ！！元はと言えばあんたがバルカンを全部倒しておかないから……っ！？」

言ってしまった、シャルルに絶望のような感情が広がる。今、ウェンディを助けられそうなのはこの破天荒な男しかいないのにこんなことを言ってしまったのは気分を害した、と帰ってしまうかもしれない。

そんな考えからしばらく口をつぐんでいると男から意外な一言が返ってきた。

「それもそうだな。じゃあ、助けにいかそのウェンディって子を。」

「えっ……な、なんで？」

「いや、子猫ちゃんが助けってくれて言ったんじゃないのか？」

「そ、それはそうだけど………ううん、お願い！！後でちゃんとお礼はするから！！」

「OK！！」「Trickster！！（トリックスター！！）」「シャルルの頼みを承諾し、ダンテは先程の戦闘の時のように指をパ

チンツと鳴らし身体が一瞬発光した。

「ほら子猫ちゃん、俺の肩に掴まりな。」

「ええ。」

「全速力で行くからよ、振り落とされるなよ。……行くぜ!!」
そう言つて、足に力を込め踏み込んだ瞬間ダンテとダンテの肩に掴まったシャルルの姿は風のように掻き消え、枝から枝へと高速で移動した。

「ちょ、ちょっと!?!速すぎよー!?!」

「HEY!!なに言つてんだ?こんなものまだまだ序の口だぜ?」

「でも、速すぎよー!!」

今にも風圧で吹き飛ばされそうになりながらダンテの肩にしがみつきシャルルは叫んだ。

「…見つけた!!」

「どこだ？」

「あそこよー！」

シャルルが指をさし、ダンテがその方向を見ると、小さな少女を抱えながら走るバルカンがいた。

「あいつか……子猫ちゃん、ちょっととばすぜ？」

「え、ええ。」

そして、ダンテはさらに足に力を込めると一瞬でバルカンの前に移動した。

「ウホッ！？さっきの人間！！」

「HEY、話せるのか？だったら話しは早い。その子を放して、とつと消えな。」

「嫌だ、この子はオデのお嫁さんにするんだ。」

「ひっ！？い、嫌ですー！！」

「……いつとおりにした方が、身のためだぜ？ゴリラ野郎。」
そう言うと、ダンテは拳を握り構えを取った。

すると、手足に不気味に光る装甲『衝撃鋼ギルガメス』が装着され

た。

「ウホオツ!!」

それと同時に、バルカンが殴りかかってくるがダンテが合わせてバルカンの脇腹を殴るとボキッボキッと音を立て拳がめり込んだ。

「きゃあっ!？」

「おっと。」

その反動で、腕に抱えていたウエンディが投げ出されたがダンテが抱き止めた。

「怪我はないか？」

「は、はい。大丈夫です。」

「そうか。」

ダンテはウエンディをゆっくりと降ろした。
すると、そこへ

「ウエンディ!!」

シャルルが駆け寄ってきた。

「あっ!!シャルル!!」

「大丈夫？」

「うん!!」

「よかった……そういえば、あんたお礼がまだだったわね。ウェンディを助けてくれてありがとう。」

「ありがとうございます!!」

シャルルがダンテにお礼を言つと、ウェンディも頭を下げお礼を言った。

「なに、俺がゴリラ野郎共を逃がしちまったのが原因だからな。当然の事をしたまでさ。」

「それでもです、本当にありがとうございます。」

そして、ウェンディがもう一度頭を下げお礼を言っているとシャルルはあることに気が付いた。

「そっいえば、あんた名前なんていうの？」

「HEY!! 普通名乗る時は、自分からじゃねえのか？」

「それもそうね、私の名前はシャルルよ。」

「私は、化猫の宿「ケットシェルター」の魔導士で、ウエンディ・マーベルと言います。」

「子猫ちゃんがシャルルで、将来有望そうなお嬢ちゃんがウエンディだな。俺はダンテだ。」

自己紹介を終えると、シャルルが質問をしてきた。

「ところでダンテ、あんたって一体何者なの？バルカンの大群を剣一本で倒すわ、とんでもない速さで移動するわ、あんた本当に人間なの？」

「んー、まあ半分正解だな。」

「半分？」

ウエンディはダンテの半分という意味が分からず首を傾げた。

「そう、半分正解さ。」

「じゃあ、もう半分は？」

「今は言えねえ。でも、いつか話してやるさ。」

「もったいぶるわね。でも、まあいいわ。」

「ところで、ダンテさんはどうしてこんな森の奥でバルカンと戦っていたんですか？」

そして、次にウェンディが質問をしてきた。

「あゝ、今一人旅をしていてな。適当に町とか、国とかを見てまわっていて、偶然ここを通った時にいきなりあのバルカンって奴らに襲い掛かられてな。」

「災難だったわね。」

シャルルは同情するように言った。

「そつえばウェンディ。」

「はい？」

「さっきお前、化猫の宿「ケットシエルター」の魔導士って言うたが……近くにギルドがあるのか？」

「はい、ここから2、3時間歩いたところにありますよ。でも、どうしてそんなこと訊くんですか？」

「なに、ちょっとそこに長居させてもらおうと思っただけよ。」

「うーん、それはマスターに訊いてみないと分かりません。」

「それじゃ、さっさとそのマスターに会いに行くか。……ギルドはどっちの方角にあるんだ？」

「ちょっと待ってて。」

ダンテの問いに、シャルルは背中から翼を出し高く飛んでギルドがどっちにあるか見渡した。

そして、降りてきて

「あっちよ。」

とギルドの方角を指差した。

「あっちか。よし、行くぞー!!」

そう言うと、ダンテはガシッとウェンディとシャルルを脇に抱えた。

「ひゃっ!?!」

「ちょ、ちょっとダンテ!?!ま、まさか!?!」

「ああ、最高速度で行くぜ。」「Trick トリックスター S t e r」

ダンテと脇に抱えられたウェンディ、シャルルはその場から消えた。

そして

「「きゃああああっ!?!?!」」

森の中から断末魔のごとき悲鳴が聞こえたのであった。

居候決定

高速移動を使い、ダンテはウエンディとシャルルが入っているギルド『化猫の宿』ケットシエルターに到着した。

「着いたぜ……って、大丈夫か？」

「あんだねえ、これが大丈夫に見える！？」

「はうう。」

シャルルがダンテにツッコミ指を指した先には、あまりのスピードに目を回してしまったウエンディがいた。

「ハハッ、やっぱり刺激が強すぎたか？」

「いえ、大丈夫です……それより、マスターのところに案内しますね……。」

「本当に大丈夫なの？」

「うん、大丈夫。心配しないでシャルル。」
ウエンディとシャルルは会話をしながら歩き出し、ダンテはその後についていった。

「あつ！！マグナ、ペテル！！」

「おう、ウエンディとシャルルか！！」

「あらウエンディ、シャルル。えっと、そっちの男性は誰かしら？」

「ダンテさんだよ。さっき薬草を摘みに行ったときにバルカンに拐われたところを助けてもらったの！！」

「まあ、もとはといえばバルカンを逃がしたのはダンテなんだから当たり前だけど。」

「もう、シャルル！！」

ウエンディとシャルルの話を聞きながら、ダンテはマグナとペテルの二人に違和感を感じた。

…魔力で溢れている……簡潔に言えばまるで魔力で構成されているような感じである。

「……テさん、ダンテさん……。」

「ん？」

「どうしたんですか？急に静かになっちゃいましたけど……。」

「いや、なんでもない。ただ、優しい奴らだなんて思ってな。」

「はははっ、嬉しい事言ってくれるじゃねえか！！ほれ、これやるよ俺が作ったリングだ。」

そう言って、かごの中からリングを取り投げ、ダンテはそのリングをパシッと掴み受け取った。

そして、マグナとペテルの二人は手を振りながら歩いていった。

「ふっ、本当にいい奴らだな。」

「そうですね！！」

「ほら、ウエンディ早くマスターのところに行くわよ。」

「ああ！？ま、待ってよ〜シャルル〜。」

しびれを切らしたのかついに翼を出し飛び出したシャルルを、ウエンディは走って追いかけた。しかし、ダンテはのんきに歩きながら後を追った。

さっきもらったリングをかじりながら…。

「ただいま戻りました、マスター。」

ウェンディは猫の頭の形をした小屋の扉を開けると、元気のいい声で帰宅を知らせた。

「うむ、今日はちと遅かったの。何か厄介事でもあったのか？」

「は、はい。ちょっとだけ……。」

「ふむ、ところでその男は誰じゃ？」

ケットシエルターのマスターは視線をダンテに向けながら訊いてきた。

「この人は、ダンテさんっていいいます。実は、さっきダンテさんに危ないところを助けてもらっただんです。」

「そうか……。」

そう言つて、ケットシエルターのマスターはコポコポと酒瓶に入っている酒をコップに注ぎ

「んぐっ……んぐっ……。」

コップに入った酒を飲まず酒瓶を傾け、らっぱ飲みをし

「なぶら、ウェンディとシャルルを助けてくれた事……ばんびやる。」

口に含まれた酒を飲まずにびちゃびちゃと垂れ流しながら礼を言った。

「HEY、じいさん汚ねえぞ。コップの方を飲めばいいじゃねえか。」

「別にいいのよダンテ、いつもの事だから。」

「What!?!マジでか!?!」

「ええ、マジよ。」

シャルルの答えにダンテは少し衝撃を受けた。

「ところで、お主は何者なんじゃ?」

「まあ、ちよつとした放浪者さ。ちなみに自慢じゃねえが、そこらの魔導士よりは強いぜ。」

「ほう。」

ダンテの話を聞いて、マスターは感心したように呟いた。

「ならばこれからどこかに腰を落ち着けるつもりはないのかね?」

「ないと言つか、今までは人にあってもその場かぎりだったからな。」

「え？じゃあ私が連れてきちゃったのは迷惑でしたか？」

「ははっ！いや、嬉しかったぜ。こんなキュートなリトルレディに助けてもらえたんだからな。」

「きゅ、キュート……………／／／」

「あんた、狙って言うてんの？」

「さあね？」

ダンテが肩を竦めながらそう言うと、シャルルは“はあゝっ”とため息を吐き、その横でウエンディは顔を真っ赤にさせて俯いていた。

「なぶら、ウエンディ達とはもう打ち解けているようじゃの〜」

「ははっ！…2人が優しいお陰さ。」

「そうか、よかったの〜2人とも。」

「はいっ！…！」

「私はちよつと苦手だけど、まあ悪い奴じゃないんじゃないかしら」

「それで、ものは相談なんじゃが……。」

ある程度会話をしていると、突然マスターは真剣な表情でダンテに質問してきた。

「ん？」

「御主、このギルドに入ってくれんかの？このギルドには戦える者が居らんのだ、御主のような強者が居ればいいんじゃないか？……どうかの？」

「……Sorry、それは無理だ。」

「そうか。」

「ただ、俺もそろそろのんびり過ごしたいと思ってたところだな。少しの間、居候って形でいいなら別にいいぜ。」

「おお、そうか……！で、いつまでここに居るつもりなんじゃ？」

「そつだな……二年ってところか。」

「なぶら、二年もかの!？」

「ああ……だめか？」

「いや、いいぞい。しかし、住むところの……。」

「あ、あの!!…マスター!!」

マスターが考えていると、突然ウェンディが手を挙げた。

「わ、私の家だったら余裕があります!!」

「ということは、ウェンディの家に泊めても良いと言うことかの？」

「はいっ!!」

「だそうじゃが、ダンテはどうじゃ？」

「別に構わねえぜ。」

「ならば、それで決定じゃな。ウェンディ、シャルル、ダンテと仲良くするんじゃぞ。」

「はいっ！！」

「私は、ちょっと不本意だけどね。」

「ははっ！！よろしくな、ウエンデイ、シャルル。」

こうして、ダンテは化猫の宿>ケットシェルター<に居候することになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0787x/>

DEVIL TAIL <悪魔の尻尾>

2011年10月31日02時24分発行